

No. 125

March 1999

甲虫ニュース COLEOPTERISTS' NEWS

日本産ハナノミ科ハナノミ族概説 2¹⁾

高 桑 正 敏

モンハナノミ属 *Tomoxia* COSTA

COSTA, 1854, Fauna dell Regno di Napoli, p. 8.

小あごひげの末端節は斧状、その外縁は前縁とほぼ同長、内縁はそれらより明らかに短い。複眼には短毛を密生する。触角は短く、第5節以降が強い鋸齒状、末端節の先端内縁がえぐられる。小楯板は台形でその後端は切断状かえぐられる。鞘翅は多少とも短い。尾節板は比較的短く、先端は切断状もしくは丸まる。後胸側板は後方へ顕著に狭まり、端は尖る。前肢は雌では直線状だが、雄ではより太くて多少とも内方へ湾曲する。中肢は細くて長く、跗節は前跗節より著しく長く、ときに後跗節よりも長い。前・中跗節の第3、4各節は棒状で第1、2節よりも細く、4節の先端は切断状。雄交尾器は種ごとに明瞭な違いを生じているが、中葉片がかなり長いにもかかわらず側葉片は非常に小さく、その左片はほぼへら状で側枝をもたず、右片も単純だが側枝を通常もつ。

第1後跗節の上縁に刻条を現すという特徴から *Paratomoxia* ERMISCH (タイプ種はアフリカ産) を採用したこともあったが、現在は使用されていない。ほぼ全世界に分布するようであるが、かなり大きくまとめられたグループらしく、海外の種類には日本産と異なる特徴をもつものも含まれている。日本産はとりあえず次の7種が認められるが、意外と問題を抱えており、とくに地域差が大きい種群は分類学的な再検討を要する。成虫は訪花習性がなく、雌はしばしば立ち枯れた木や倒木に飛来

するが、雄は習性がわかっておらず、採集例はより少ない。

種への検索表

1. 前胸背板は中央に大黒紋が広がり、側方の黒紋はごく小さい; 鞘翅の灰白紋はあざやか、その中に不規則ないくつかの小黒点を現す; 鞘翅後方に紋を生じない。…

……………ネジロモンハナノミ

— 前胸背板は中央と両側に通常
の黒紋を並列するか、ときに不明
瞭; 鞘翅の灰白~金黄色紋はとき
に不明瞭、その中に明らかな小黒
点を現すことがない; 鞘翅後方な
いし端方に紋を生ずるか、生じな
い時は鞘翅の斑紋が不明瞭。…2

2. 前胸背板の黒紋はきわめて不明
瞭、前方に横に並ぶ黒紋を認め
られない; 鞘翅の紋は淡黄~灰白
色で多少とも不明瞭、後方に帯紋
をもたない(会合部沿いの縦条紋
は現れる)。……………3

— 前胸背板の黒紋は明瞭もしくは
はやや不明瞭、前方に小黒紋を並
列する; 鞘翅の紋はふつう黄~金
黄色で明らかな、後~端方に帯紋を
もつ。……………5

3. 触角末端節はより太く、雌で
幅の1.9倍程度; 鞘翅中央後方の
1対の紋は縦のいくつかの黒条に
よって分断傾向にある; 尾節板は
一見して太短く、先端は幅広く切
断状。……………

……………フトオモンハナノミ(新称)

— 触角末端節はより細く、雌で幅の2.3-2.4倍程
度; 鞘翅中央後方の1対の紋は円形で黒条により刻
まれない; 尾節板は一見して細く、先端は狭く切断
状またはやや丸まる。……………4

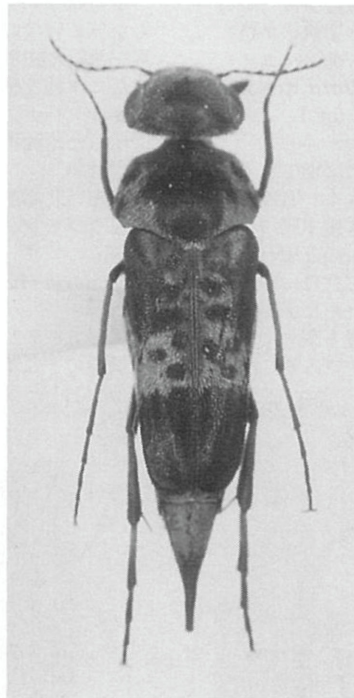


図1. ネジロモンハナノミ *Tomoxia scutellata* Kôno, ♂.

¹⁾ TAKAKUWA, M., Notes on the tribe Mordellini (Coleoptera, Mordellidae) of Japan, 2.

4. 鞘翅と前胸背板の紋はより不明瞭；鞘翅中央の紋は会合部の縦条紋とほぼつながる傾向にある；雄交尾器の側葉片の右片はやや長い側枝を備える。……ジュウジモンハナノミ

— 鞘翅と前胸背板の紋はより明瞭；鞘翅中央の紋は会合部の縦条紋とかなりつながる程度；雄交尾器の側葉片の右片はごく短い側枝を備えるか、ほとんど側枝をもたない。……フタモンハナノミ

5. 体は非常に短く、鞘翅は幅の1.6-1.72倍程度、両側はえぐられずに徐々に後方へ狭まる；前胸背板の側縁はほぼまっすぐ、後角は丸まる；鞘翅の端前の紋は錨型。……リュウキウモンハナノミ

— 体はより長く、鞘翅は幅の1.85-1.9倍程度、両側はいったん中央でえぐられてから端方へゆるやかに狭まる；前胸背板の側縁は後方でややえぐられ、後角はやや角張る；鞘翅の端前の紋は斜めになってほぼ帯~四角形状。……6

6. 前胸背板の黒紋は12個；鞘翅の紋は灰白色；尾節板は徐々に細まり、先端は広く丸まる。……

……オガサワラモンハナノミ
— 前胸背板の黒紋は6個；鞘翅の紋は淡黄~金黄色；尾節板は急に細まり、先端は狭く切断状か狭く丸まる。……モンハナノミ

ネジロモンハナノミ *Tomoxia scutellata* Kôno

Kôno, 1928, Ins. matsum., 2: 147, fig. 1.

体長 6.5-9 mm.

その独特な斑紋から他種とは容易に区別できる。

また、雄交尾器の側葉片は非常に小さく、右片が長くない点も併せて考えると、日本産本属の中では他種群とかなり系統を違えているものと思われる。

ブナ帯に生活し、とくにブナの立ち枯れに多く姿を見る。日本の固有種で、北海道~九州に広くほぼ連続的に分布するが、手元の資料を見る限りでは北海道と九州での採集例が少ないようである。深町

(1974)は北海道で本種がシナノキの若枝に集来したことを観察している。また、大桃(1986)は灯火に飛来した例を記録している。

分布：北海道、本州〔基準産地〕、四国、九州。

フトオモンハナノミ (新称) *Tomoxia* sp.

非常に問題の多い種で、種名はまだ確定していない。体長 6.9-7.4 mm.

次種に一見よく似るが、体は多少とも大きく、尾節板は太短くて背面の隆起は弱く、先端が幅広く切断される点などで、明らかに区別できる。触角末端節は太く、雌で幅の1.9倍程度。前胸背板と鞘翅は紫銅色光沢をもった暗色毛で一面おおわれ、灰白色の鱗毛~細毛でいくらか不明瞭な紋を形成する。鞘翅の紋の出現パターンは基本的にジュウジモンハナノミのそれに似るが、紋様はより明らかである。また、基部紋、会合部前半周辺の縦条紋、それに1対の中央後方紋ともに地色の縦の黒条線によりいくつかに分断される傾向が著しいものの、その分断が不明瞭な個体もある。分断が顕著な個体は一見、北アメリカ産の *T. lineella* LeConte の斑紋を思わす。

筆者はまだ北海道網走支庁生田原産の3雌個体しか見ていない。ただし、Kôno(1928)が次種の新種記載時に図示した雌は、尾節板を見る限りでは明らかに本種と思われる。さらに、NOMURA(1967)がフタモンハナノミを新種記載した際に、次種として図示した雄触角と雄交尾器も本種のものである可能性が強い。

分布：北海道(東北部)。

ジュウジモンハナノミ *Tomoxia biguttata* crux Kôno

Tomoxia crux Kôno, 1928, Ins. matsum., 2: 148, fig. 2.

体長 5.8-7.2 mm.

前種のところで述べたような問題があるが、筆者

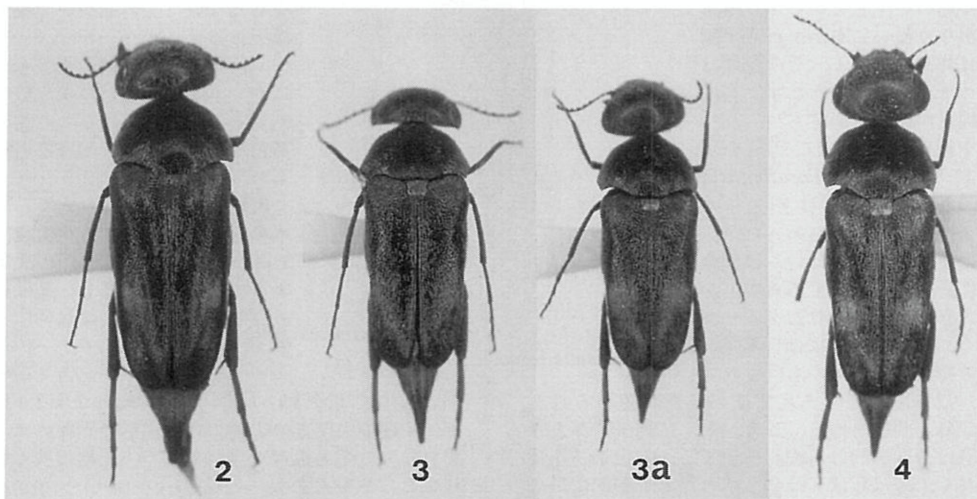


図2-4. ジュウジモンハナノミ群。——2: フトオモンハナノミ *Tomoxia* sp., ♀, 3: ジュウジモンハナノミ *T. biguttata* crux Kôno, ♂, 3a: ditto, ♀, 4: フタモンハナノミ *T. similis* NOMURA, 福島県産, ♀。(以上は等寸大)

はまだ河野博士のタイプ標本列を見ていないので、ここでは従来のごとくに種名を当ておく。次種にきわめて近いが、雄交尾器の側葉片右片には明らかな突起を備える点で大きく異なる。背面の灰黄ないし灰白色紋は非常に不明瞭で、ときに紋として認められない個体も生じる。

北海道では広く分布しているようである。深町(1974)は本種成虫がヤナギ類の樹幹上を這うことを報告したが、本属の種に限らず、ハナノミ科全体で生木の幹に集来する習性は異例のことである。ただしもちろん、同属の他種のように立ち枯れ木や倒木からも得られている。

分布：北海道 [基準産地]。

基準亜種 *T. biguttata biguttata* (GYLLENHAL) はユーラシア大陸北部とサハリンに分布する。

フタモンハナノミ *Tomoxia similaris* NOMURA

NOMURA, 1967, Ent. Rev. Japan, 19: 57, text figs. 8a-8d.

体長 6-7.7 mm.

NOMURA (1967) により新種記載されるまでは前種に含まれていた。前種と外形はきわめて似るが、体はやや大きく、雄交尾器の側葉片の右片は側枝を欠くか、生じててもごく短い点で区別できる。地域変異が見られ、西日本のものほど斑紋が多少とも縮小して見た目にもあざやかとなり、また雄交尾器の側葉片の右片の側枝は西日本の個体ではほとんど現れ

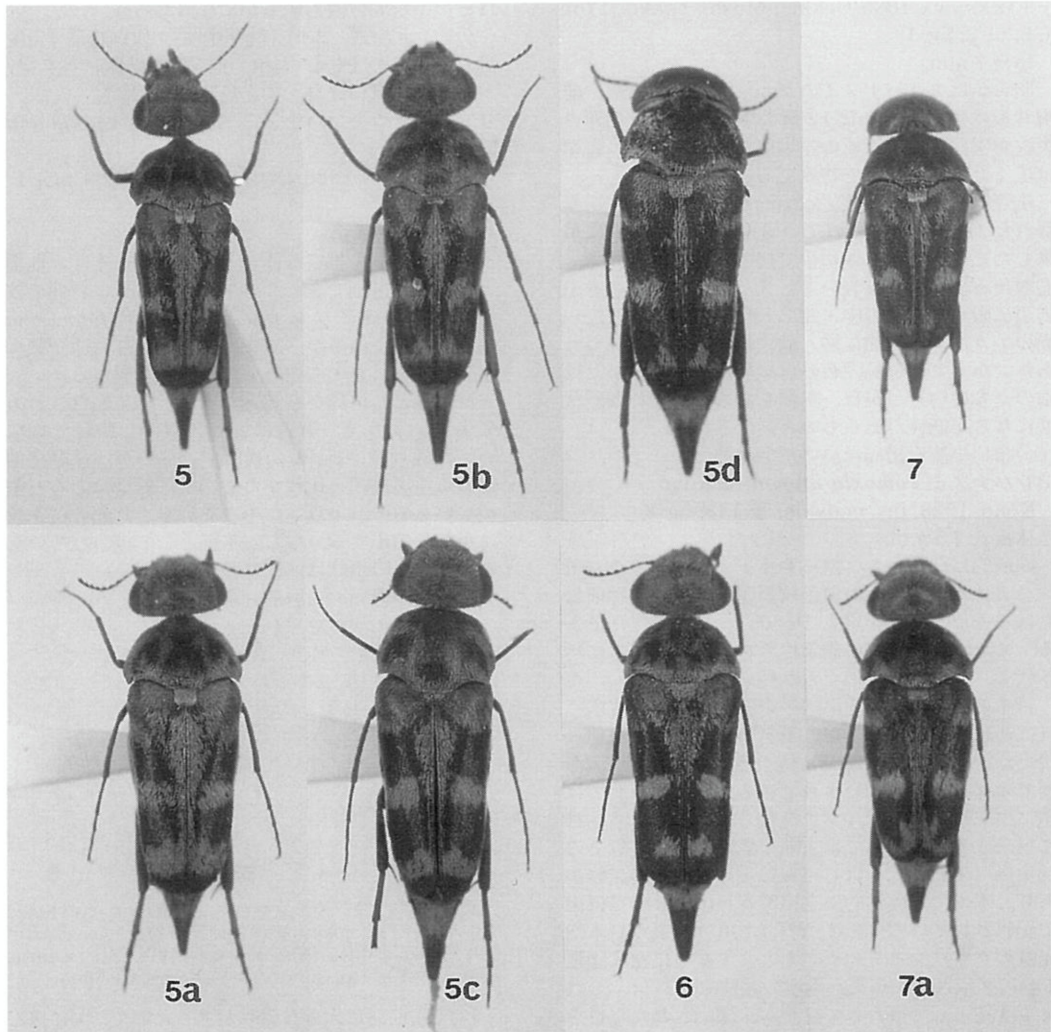


図5-7. モンハナノミ-リュウキュウモンハナノミ群。—5: モンハナノミ *Tomoxia nipponica* KONO, 本州産, ♂, 5a: ditto, 本州産, ♀, 5b: ditto, 伊豆諸島産, ♂, 5c: ditto, 伊豆諸島産, ♀, 5d: ditto, トカラ口之島産, ♀, 6: オガサワラモンハナノミ *T. relicta* TAKAKUWA, ♀ holotype, 7: リュウキュウモンハナノミ *T. ryukyuna* TAKAKUWA, 沖縄島産, ♂, 7a: ditto, 八重山諸島産, ♀. (以上は等寸大)

ないようだが、東北日本の個体では短いながら生じるようになる。前種との種間関係を含め、十分な検討を要するだろう。

ブナ帯に生活し、モンハナノミやネジロモンハナノミとともにブナの立ち枯れに姿を見ることが多い。青森県から九州にかけて広く分布するが、手元の資料を見る限りではモンハナノミやネジロモンハナノミよりは局地的な傾向があり、また四国では高知県でしか記録されておらず、九州では北部しか記録がないようである。

分布：本州〔基準産地〕、四国、九州。

オガサワラモンハナノミ *Tomoxia relicta* TAKAKUWA

TAKAKUWA, 1985, Gekkan-Mushi, Tokyo, (176): 4, 8, pl. 2, fig. 1.

体長 7 mm.

明らかにモンハナノミのグループに属するが、前胸背板にはあざやかな 12 個の黒紋を備え、鞘翅の斑紋が灰白色、尾節板の前半部は細くならず、先端は広く丸まる点などで特異である。

小笠原諸島母島の桑ノ木山近くで筆者により採集された 1 ♀ だけが知られている。立ち枯れた木に飛来したところをとっさに手で押さえつけたもので、右触角と後肢などを欠いてしまった。その桑ノ木山周辺に限らず母島の中・北部一帯の山地は現在、一面のアカギ（人為的な移入植物）の林に変わりつつあり、かつての母島固有の自然林に生活していた昆虫のうちのいくつかは、本種を含めていずれ壊滅状態になる可能性があるものと懸念される。

分布：小笠原諸島母島〔基準産地〕。

モンハナノミ *Tomoxia nipponica* Kôno

Kôno, 1928, Ins. matsum., 2: 148, fig. 3.

体長 6-7.5 mm.

同所的に分布するフタモンハナノミやジュウジモンハナノミとは背面の黄色紋が明瞭なこと、端前にもはっきりした紋を現すことで、一見して区別できる。また、雄交尾器の側葉片の右片は側枝ともにヘラ状で、左片よりもいくらか長い。

日本の固有種で、北海道～奄美大島にかけて広くほぼ連続的に分布するが、筆者の知る限りでは伊豆諸島、トカラ列島、奄美大島、それに意外だが北海道での採集例が少ないようである。九州より北では主にブナ帯に生活し、ブナをはじめとした立ち枯れに飛来するが、九州では大隅半島南端の佐多岬での採集例（未発表）をはじめシイ・カシ帯での記録があり、本州でも例外的に奈良県春日山のような低山で記録されている。また、野村（1963）により日本初記録の台湾モンハナノミとして原色昆虫大図鑑 2 巻に図示された奄美大島産の個体（♀）は、これまで次種として扱われてきたが、図示された写真を見る限りでは本種に含めるべきと思われるので、ここではそのように扱った。

地域変異が多少とも認められる。伊豆諸島産は体と中・後肢がいくらか長く、鞘翅の小楯板後方の会

合部沿いの縦状紋と端前の紋は縮小する傾向が認められるほか、尾節板は端へよりゆるやかに細まり、♀は肩が赤色となるという特徴があり、また雄交尾器も若干異なっているが、四国・九州産の個体との区別が必ずしも判然としない。トカラ列島産は口之島と中之島からの各 1 ♀ を検しているにすぎないが、後者は鞘翅肩部の色彩以外は伊豆諸島産にほぼ一致する一方で、前者の個体は図示したように体が一見してより太く、背面の黄色紋は縮小がさらに著しいなどの特徴を備えている。奄美大島産は野村（1963）が記録した 1 ♀ の写真から判断するなら、体型と斑紋の出方は口之島の個体に似ているものの、次種とのつながりも想起させる。雄個体が得られればその系統的位置も明らかになるだろう。

分布：北海道、本州〔基準産地〕、伊豆諸島（三宅島、御蔵島）、四国、九州、福岡県沖ノ島、屋久島、トカラ列島（口之島、中之島）、奄美大島。

リュウキュウモンハナノミ *Tomoxia ryukyuan* TAKAKUWA

TAKAKUWA, 1985, Elytra, Tokyo, 13: 69, figs. 1-3.

体長 5-6.2 mm.

短くて丸みを帯びた体をもつ点で、日本産の他種とは容易に区別できる。外部形態、とくに背面の紋様は台湾の台湾モンハナノミ *T. formosana* CHÛJÛO によく似るが、雄交尾器の側葉片は原記載に示したように左・右片ともにまったく異なる。

沖縄島と石垣島から知られるが、採集例はきわめて少ないようで、筆者はまだ数個体しか見ていない。沖縄島産は 2 ♂ しか検していないが、基準産地である石垣島産と比較すると、交尾器はほとんど差がないものの、より体が小さく短く、背面の黄色紋はかなり縮小する。なお、本種として扱われていた奄美大島産の個体は前種に移した。

分布：沖縄島、石垣島〔基準産地〕。

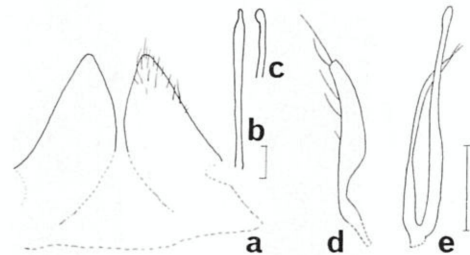


図8. リュウキュウモンハナノミ *Tomoxia ryukyuan* TAKAKUWA, ♂, holotype. —a: 第8腹板, b: 交尾器中葉片先端部, c: ditto, 側面, d: 交尾器側葉片(左), e: ditto, (右). —d-e: TAKAKUWA (1985). Scales: 0.25 mm.

【訂正】前回に大きな誤りがあったので、次に謹んで訂正する。2 頁右段上 13 行；3 頁左段上 1 行；4 頁左段上 13 行・14-15 行・18 行（2カ所）脛節→附節 [正]；4 頁右段上 11 行（Kôno）→Kôno [正]；図5 山口県光市と鹿児島県鹿児島市を追加。

日本産タマキノコムシ科 *Pseudocolenis*, *Pseudoliodes* 両属の分類学的諸問題

保 科 英 人

日本産タマキノコムシの採集は、落葉から抽出するか、キノコや倒木をピーティングするか、この二つが一般的な方法である。そして、取りにくいとされているタマキノコムシの中で、比較的個体数を確保しやすいのが、チャイロヒメタマキノコムシとウスイロヒメタマキノコムシの2種である。これら2種は、春から秋にかけて、キノコをピーティングすることにより、主に採集されるが、まれに冬季に落葉中から見つかることもある。これらの2種は採集しやすいこともあり、各地の昆虫同好会が作成する地方リストに、頻りに名前がでてくる存在である。しかし分類学的には大混乱ともいふべき事態におちいつている。正体は判明しているものの、対応する学名に混乱が生じているのである。ここでまず、日本産両属に含まれる種を扱った2つの主要文献の内容を紹介し、使われた学名・和名を記し、また簡単な特徴をまとめてみた。

甲虫図鑑：久松(1985)の要旨

Pseudoliodes latus (PORTEVIN, 1905) オオヒメタマキノコムシ

上翅は粗い細溝があり、明瞭な点刻列がある。その列間はほぼ無点刻。他の3種に比べてやや大きく、体色もやや濃い。

Pseudoliodes strigosula (PORTEVIN, 1905) チャイロヒメタマキノコムシ

上翅に密な細溝があり、点刻は非常に粗。

Pseudoliodes piceus (HISAMATSU, 1964) アマミヒメタマキノコムシ

分布地域は、奄美大島と台湾。しかし、著者が沖縄本島、そして国立科学博物館の野村周平博士がトカラ列島より採集し、琉球全体に分布することがわかった。現在のところ、日本産他種とは、分布は重ならない。

Pseudocolenis hilleri REITER, 1884 ウスイロヒメタマキノコムシ

(=*Pseudocolenis grandis* PORTEVIN, 1905)

上翅は細溝があり、明瞭な点刻列がある。その列間に点刻を持つ。

※甲虫図鑑で扱われた上記の4種の他に、*Pseudocolenis magnicornis* PORTEVIN, 1927 という種が日本から記録されている。

DAFFNER (1988)の要旨

DAFFNER (1988)はまず、*Pseudoliodes* 属は、*Pseudocolenis* 属のシノニムとしたうえで、日本産種の一部を他種のシノニムとした。その結果、日本のファウナは次のようになった。

Pseudocolenis hilleri REITER, 1884 ※属名で、「d」のあとに「o」が入らないことに注意！

(=*Pseudoliodes strigosula*)

上翅に密な細溝があり、点刻は非常に粗。

Pseudocolenis picea (HISAMATSU, 1964)

形態的特徴は、久松(1985)の内容とほぼ同じ。

Pseudocolenis grandis (PORTEVIN, 1905)

(=*Pseudoliodes latus*)

(=*Pseudocolenis magnicornis*)

上翅は細溝があり、明瞭な点刻列がある。その列間に点刻を持つ。

DAFFNER (1988)の方が、久松(1985)より後であり、きちんと分類学的処置もしてあるのだから、今のところ、DAFFNER (1988)の使用した学名を踏襲するしかない。この論文は、*Pseudoliodes* 属のほか、ややこしい数属も整理していて、分類学的貢献度はすこぶる高いと言わねばならぬ。しかし、日本産種に関してはいささか疑念が残るのも事実である。また、日本の甲虫屋のバイブルともいふべき「甲虫図鑑」とは、180度異なる記述もあるので、面食らう人も多いであろう。例えば、DAFFNER (1988)では、「上翅に密な細溝があり、点刻は非常に粗」が、*P. hilleri* で、*P. strigosula* は *P. hilleri* と同物であり、逆に甲虫図鑑で、*P. hilleri* と同物とされていた *P. grandis* が「上翅は細溝があり、明瞭な点刻列がある。その列間に点刻を持つ」とされているのである。さらに不都合なことに、DAFFNER はドイツ語でしか論文を書かないし、日本では見にくい雑誌に投稿することも少くないので、タマキノコムシの専門家以外の方々は、彼の論文に目を通すことは少ないであろう。

さて、DAFFNER (1988)と久松(1985)の間の矛盾を、どのように判断すべきであろうか。「甲虫図鑑」が間違っていると言ってしまうは楽なのだが、簡単にそうとは言いかねるところがある。なぜなら DAFFNER は論文を書くにあたって関連する種のタイプ標本を見ているのだが、久松定成博士もまた、相当タイプ標本をあたられているのである。こうなれば原点に帰れである。著者は、野外で標本を蓄積し、原記載の収集をして、また日本産種すべてのタイプ標本を借り、日本産種に関する新知見を得ることができた。以下、その知見を紹介する。ちなみに、アマミヒメタマキノコムシのタイプは愛媛大学、そしてそれ以外の種のタイプ標本はすべて仏国の都パリ自然史博物館にある。

著者の結論からいってしまうと、*Pseudoliodes* 属が *Pseudocolenis* 属のシノニムという DAFFNER (1988)の処置は妥当であると思える。そして、*Pseudocolenis grandis* のシノニムとされた *Pseudoliodes latus* は、*Pseudocolenis lata* (PORTEVIN, 1905) として復活する。この種が、他の日本産種と比べて別種という結論は、関連種とのオス交尾器の比較からも支持された。

さて、残された問題は、*P. hilleri*, *P. grandis*, *P.*

strigosula の3種の関係である。これら3種の相互関係は、三国志も顔負けの混乱ぶりである。著者が、これら3種のタイプ標本3個体を調べてみると、明らかに2種分しかなかった。実際のところ、DAFFNER (1988) と久松(1985) 両文献でも、これら3種が2種に統合されるという点では一致しているのである。ようするに、問題はその2+1の組み合わせと、野外で採集される虫との適合である。*P. hilleri* のタイプ標本は、「上翅に密な細溝があり、点刻は非常に粗」の状態であり、*P. strigosula* のタイプ標本も同じ形質を持つ。そして、*P. grandis* は「上翅は細溝があり、明瞭な点刻列がある。その列間に点刻を持つ」状態であった。タイプだけ見ると、明らかに DAFFNER (1988) の方が正しいので、「ダフナー先生ありがとうございます」といって問題解決となるところだ。

しかし、ここで私事にわたって恐縮であるが、著者は1998年夏、愛媛大学で久松博士にお会いする機会に恵まれた。ここで博士から、「*P. hilleri* のタイプ標本と、REITTER (1884) によって書かれた原記載の記述があわない」という情報をいただいたのである。REITTER の記載の上翅の部分を拾い出してみると、「上翅は、横の細溝があり、点刻列と、その間に点刻がある」とあるから、DAFFNER (1988) のいう *P. grandis* の形質と一致する。つまり原記載上では、久松博士の書かれた甲虫図鑑で示された *P. hilleri* = *P. grandis* という関係が成立する。これら3種の関係は、少女マンガで描かれるぐちゃぐちゃの男女関係のようである。以下、学名で話を進めるとややこしいので、「上翅に密な細溝があり、点刻は非常に粗」である種をチャイロヒメタマキノコムシ、「上翅は細溝があり、明瞭な点刻列がある。その列間に点刻を持つ」である種をウスイロヒメタマキノコムシとする。

何人かの先生方からお聞きした話だが、REITTER のお孫さんは、偉大なる祖父のコレクションを売る時に、格づけのためにタイプラベルをつけたという。REITTER は、第一次世界大戦直後の1920年に、ドイツ帝国の敗北のあとを追うかのように没しているから、標本が売られたのはその後のことであろう。そのため、タイプというラベルがあっても、本当に REITTER が、タイプとしたのかどうかわからない場合もあるという話を以前に聞いた。前述の3種の混乱の源は、この「格づけ」かもしれないが、あくまでも疑いであり断定はできない。また、チャイロヒメタマキノコムシの上翅も完全に無点刻ではないので、REITTER の記載した *P. hilleri* と強引に結びつけることも不可能ではない。

REITTER のコレクションは分散して、パリ自然史博物館を中心としつつも、いくつかのヨーロッパの博物館にあるという。従って *P. hilleri* ら3種の分類学的問題の解決方法の選択肢は、次の2つしかない。1つめの案は、DAFFNER (1988) が使用した学名の安定性を重視して、現在パリ自然史博物館にあ

る、*P. hilleri* のタイプを本物であると信じること。つまり、「いまいち、原記載と合わないんだがな」という気持ちをおし殺し、これら3種に関しては、DAFFNER (1988) の見解に従うというもの。2つめの案は、現在パリにある *P. hilleri* のタイプは、ニセモノであると天下に公言し、7年戦争時のプロイセンのフリードリヒ大王ばりの行動力で、ヨーロッパ大陸を蹂躪し、各地の博物館のコレクションを徹底的にあさって、REITTER の原記載とあう *P. hilleri* のタイプを見つけること。見つからなければ、新たなるタイプ指定も辞さずとの覚悟を持つこと。つまりあくまで原記載を重視するというもの。1つめの案は、むりやり原記載とタイプ標本を結びつけたというリスクを負うし、2つめの案は、パリ以外のヨーロッパの博物館で、*P. hilleri* のタイプが必ず見つかるとは限らないし、見つかってもパリのものと同種であれば何も解決しないというリスクを持つ。どちらにせよ、問題解決のためには、何らかのリスクを背負わねばならないようだ。分類学の精神という観点から見ると、2つめの案の方が優れていると思えるが、実際にかかる費用と時間を考えると、1つめの案の方が魅力的とも言えないこともない。また学名の安定性という概念もある。どちらにせよ、この両案は一長一短である。

私は別にタマキノコムシの分類が憎くて、わざと混乱させようとしているのではないが、西日本には、ウスイロヒメタマキノコムシと非常に酷似しているグループが、存在することを認めなければならない。この種は交尾器の先端の形と、inner sac の sclerites が、ウスイロヒメタマキノコムシのそれと少しではあるが、無視できない違いをもつのである。さらに、このグループは、いままでに記録・記載されたものとは違うものである。これを、別種とすべきか、種内変異でかたづけられるかは、まだ検討段階である。ちなみに、このグループは、ウスイロヒメタマキノコムシとほぼ完全に同所的に分布しており、亜種とはしがたい。

上記の諸問題をここまで検討してきた。 *Pseudocoliodes* 属が *Pseudocolenis* のシノニムという結論と、*Pseudocolenis lata* の復活という結論により、DAFFNER (1988)、久松(1985) のどちらかを100%踏襲することはできない。とりあえず著者は学名の安定性を重視し、DAFFNER (1988) の分類体系を基本的に踏襲し、それにプラスアルファとして、*Pseudocolenis lata* の復活と、前述したウスイロヒメタマキノコムシの近似グループに対する何らかの処置を加えて、日本産 *Pseudocolenis* 属を4種ないし5種でまとめるという仮説を立てている。このやり方が、最も現実に即した解決法ではないかと思考している。なお、この考えは近いうちに、正式な欧文論文として発表する予定である。しかし、今まで述べてきたような、タイプと原記載の不一致は、タマキノコムシに関してのみ見られる状態ではなからうから、著者の考えに対して、諸方面からのご意見・ご

批判を期待する。

末筆ながら、様々なご助言をくださった愛媛県松山市在住の久松定成先生、愛媛大学所蔵のタイプ標本を見る便宜を与えてくださった同大学の大林延夫・酒井雅博両先生、琉球産の標本を提供してくださった国立科学博物館の野村周平先生、またタイプ標本を送ってくださったパリ自然史博物館のNicole BERTI 女史の方々に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- DAFFNER, H., 1988. Monographische Bearbeitung der Gattung *Pseudocolenis* (Coleoptera, Leiodidae, Pseudoliadini). *Rev. suisse Zool.*, **95**: 151-179.
- REITTER, E., 1884. Bestimmungstabellen der europäischen Coleopteren. XII. Necrophaga. *Verh. naturf. Ver. Brünn*, **23**: 3-122.
- 久松定成, 1985. 甲虫図鑑 2 巻 (タマキノコムシ科): 233-237. pl. 42. figs. 1-33. 保育社.

(九州大学農学部昆虫学教室)

日本産デオキノコムシ科 3 種についての覚書

森本 桂・保科英人

著者の一人森本は 1963 年に白水 隆先生と共著で日本産の *Scaphidium* 属をまとめ、また 1968 年にはパリの自然史博物館 Museum National d'Histoire Naturelle で ACHARD の標本を調べる機会があり、幾つかの種についてメモを作成し、JEANNEL が使用したという描画装置付の実体顕微鏡を用いてタイプ標本の写生をしてきた。J. ACHARD は当時デオキノコムシ科について多数の論文を発表しており、日本産の Revision (1923) も公表している。30 年以上も昔のことであるので、保科が最新の情報でこのメモを整理して、共著で公表することにした。

1. *Scaphidium insulare* ACHARD, 1923

(=*Scaphidium reitteri* LEWIS, 1879)

本種は Japon: Ile Kiushu: Kagoshima: Ile Oshima から記載されたもので、タイプ標本(図 1-4)には [Archipel/Liou-Kiou/Ile d'Oshima/Ferrié 1895][Obth.] のラベルが付けられており、SHIRÔZU & MORIMOTO (1963) で処理した通り *S. reitteri* の赤地に黒紋のある型で、奄美産を三輪 (1935) が最初 *S. reitteri* として図示し、三輪・水戸野 (1943) で *S. insulare* が訂正したものと同物である。中根 (1963) がアマミデオキノコ *S. insulare* として図示したものは明らかに別種で、前胸の形が異なる。三輪・水戸野 (1943) は「鞘翅は黒色にして肩に 1 黄褐色紋あり…」とし、中根 (1955) もこれを再録しているが、明らかに原記載の誤訳で、「黄褐色の地に黒紋あり…」が正しい。なお、偶然ではあるが中根 (1963) がアマミデオキノコムシとして図示した奄美産の未記載種はこの誤訳に近い斑紋を持っている。ロンドンの自然史博物館には *S. reitteri* が 22 頭あり、内 3 頭は奄美産 [Vries Island] [29. 11. 80] である。なお、LÖBL (1997) は、*Scaphidium insulare* のタイプ標本をパリの自然史博物館のほか、チェコ・プラハの博物館でも確認している。

2. *Scaphidium japonum* REITTER, 1877 ヤマトデオキノコムシ

日本各地に多い種で、SHIRÔZU et MORIMOTO (1963) は *S. longipes* LEWIS を同種として整理した。中根 (1955) が指摘した通り、本種にはかなりの地域変異と個体変異がみられることから、両種を含めて多数の標本による再検討が望まれる。図 5-7 は ACHARD コレクションにあるタイプ標本を写生したもので、上翅の斑紋は黄白色である。ラベルは [Japanum/m/Japan] [TYP./REITTER] [TYPE]。なお、ロンドンの自然史博物館にも本種の [Type] とラベルされた標本がある。LÖBL (1997) は、本種のタイプ標本は、パリ自然史博物館に所蔵されているとしており、ロンドンのタイプ標本に関しては一切言及しておらず、従ってレクトタイプの指定はなされていない。

3. *Scaphidium lewisi* (ACHARD, 1923) セモンコガタデオキノコムシ (レビスコガタデオキノコムシ)

本種は、*Scaphidiolum lewisi* として、ACHARD (1923) に記載されて以降採集されておらず、三輪・水戸野や中根によって原記載が翻訳されただけである。タイプ標本(図 8-12)には、[30. 5. 81] のラベルが付けられており、LEWIS によって長崎で採集されたものであることがわかる。種名ラベルに [*Scaphoides lewisi* ACHARD] が付けられており、体長は 5 mm である。*Scaphidiolum* 属は複眼が大きくて相接近する特徴で *Scaphidium* 属から区別されたが、その後、LESCHEN & LÖBL (1995) によって後者のシノニムとされた。

引用文献

- ACHARD, J., 1922. Essai de groupement des espèces du genre *Scaphidium* OL. *Fragm. Ent.*: 10-13.
- 1923. Descriptions de Scaphidiides nouveaux. *Ibid.*: 39-45.
- 1923. Revision des Scaphidiidae de la fauna japon-

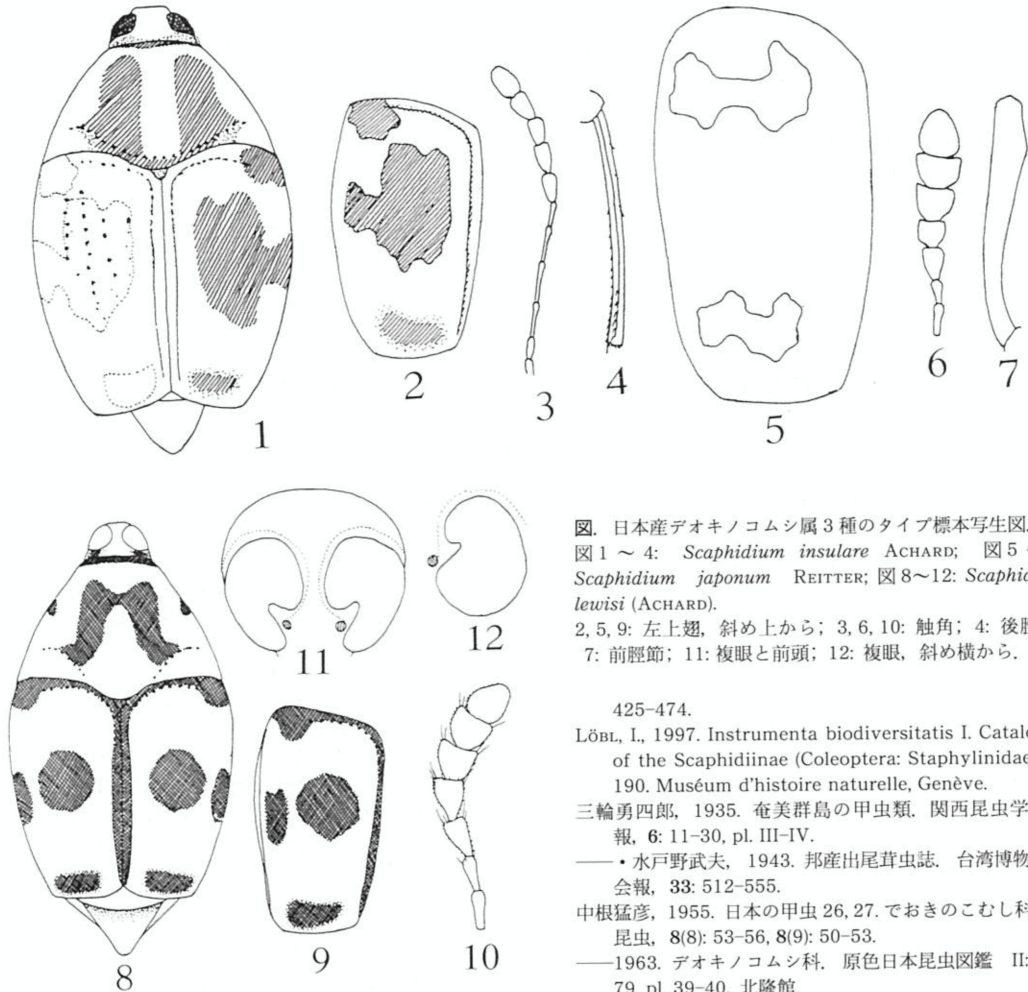


図. 日本産デオキノコムシ属3種のタイプ標本写生図。
 図1～4: *Scaphidium insulare* ACHARD; 図5～7: *Scaphidium japonum* REITTER; 図8～12: *Scaphidium lewisi* (ACHARD).
 2, 5, 9: 左上翅, 斜め上から; 3, 6, 10: 触角; 4: 後脛節; 7: 前脛節; 11: 複眼と前頭; 12: 複眼, 斜め横から。

425-474.

LÖBL, I., 1997. Instrumenta biodiversitatis I. Catalogue of the Scaphidiinae (Coleoptera: Staphylinidae), 1-190. Muséum d'histoire naturelle, Genève.

三輪勇四郎, 1935. 奄美群島の甲虫類. 関西昆虫学会会報, 6: 11-30, pl. III-IV.

—・水戸野武夫, 1943. 邦産出尾茸虫誌. 台湾博物学会会報, 33: 512-555.

中根猛彦, 1955. 日本の甲虫 26, 27. でおきのこむし科. 新昆虫, 8(8): 53-56, 8(9): 50-53.

—1963. デオキノコムシ科. 原色日本昆虫図鑑 II: 78-79, pl. 39-40. 北隆館.

SHIRÔZU, T. and K. MORIMOTO, 1963. A contribution towards the knowledge of the genus *Scaphidium* OLIVIER of Japan. *Sieboldia*, 33: 55-88, pl. 3-8.

(九州大学農学部昆虫学教室)

aise. *Ibid.*: 94-120.

LESCHEN, R. A. B. and I. LÖBL, 1995. Phylogeny of Scaphidiinae with redefinition of tribal and generic limits (Coleoptera: Staphylinidae). *Rev. suisse zool.*, 102:

○本州におけるキュウシュウヒメコキノコムシの採集記録

キュウシュウヒメコキノコムシ *Litargus kyushuensis* MIYATAKE は九州に分布するとされている(宮武, 1985) が, 筆者は本州で採集しているので, 以前報告した千葉県の記録も含め報告する。

千葉県君津市郷台畑 (木元, 1997); 2頭, 山梨県韮崎市御座石鉱泉, 25. V. 1997; 32頭, 福島県館岩村鱒沢, 31. V. 1998; 1頭, 栃木県日光市男体山志津小屋, 27. VI. 1998; 2頭, 福島県いわき市四時川林道, 1. VIII. 1998. (全て筆者採集)

採集地はいずれも自然度の高い森林地帯で, 各種照葉樹, モミ等の生える暖温帯 (郷台畑・標高約

320 m) から, オオシラビソ, ナナカマド等の生える亜寒帯 (志津小屋・標高 1,785 m) にまで及んでいる。いずれも, 菌類の生じた広葉樹の枯死木から採集した。

末筆ながら, 標本を同定して下さい九州大学の上野輝久氏にお礼申し上げる。

参考文献

木元達之助, 1997. 甲虫ニュース, (118): 8.

宮武睦夫, 1985. 原色日本甲虫図鑑(III). コキノコムシ科: 285-288. 保育社, 大阪.

(東京都足立区, 木元達之助)

ホンシュウチビジョウカイについて

桐山 功

Malthodes ohbayashii WITTMER, 1954 ホンシュウチビジョウカイは、愛知県東加茂郡賀茂村（現在は足助町賀茂地区となり、この地名は国土地理院の地形図上には残っていない）を模式産地として記載された種である。桐山(1998)が岐阜県中津川市黒井沢（恵那山）から記録した以外、まだ本種の追加記録は見えていない。その後、中部地方各地での調査を続けた結果、下記の地点で採集されたのでその♂交尾器と腹部末節の図を添えて報告したい。

4♂♂, 長野県下伊那郡上村御池山, 1. VI. 1998, 桐山 功採集。

なお、本種は WITTMER (1954) の記載文やその付図によると、*Malthodes sulcicollis* KIESENWETTER ムネミゾチビジョウカイと非常に近似しており、検索表では末端腹節の形状によって識別できるとあるが、上記の4♂♂と、桐山(1998)が長野県下伊那郡上村しらびそ高原からムネミゾチビジョウカイとして記録した個体、さらに岐阜県中津川市黒井沢（恵那山）から本種として記録した個体を使い、その♂交尾器や腹部末節を第4図の視点の方向から見て調べた結果、次に示す表のようになった。

個体番号	1	2	3	4	7	5	6
部位 a の長さの割合	23	27	23	22	22	29	27
部位 b の長さの割合	5	2	4	4	3	4	4
部位 c の長さの割合	12	12	6	9	10	9	9
部位 d の長さの割合	4	3	2	3	4	3	4
腹板末節の形	R	P	Q	R	P	R	R
♂交尾器の形	K	K	K	K	K	J	J
産地	御	御	御	御	し	黒	黒

(表の注1)

部位 a, b, c, d と腹板末節の形 P, Q, R, ♂交尾器の形 K, J は図参照のこと。

(表の注2)

産地の「御」は長野県上村御池山, 「し」は長野県上村しらびそ高原, 「黒」は岐阜県中津川市黒井沢。

以上のことにより本種には生息する地域によって♂交尾器の形態に少し変異があるが、亜種として区別するほどではないことや、同一地域内に産する個体の中でも腹板末節の形に相当な変異があることがわかった。特に腹板末節の先端にある裂け目の深さには大きな差があり、腹板末節の裂け目の深さによって *M. sulcicollis* とした桐山(1998)の長野県上村しらびそ高原の記録は *M. ohbayashii* として訂正したい。これにより本種が愛知県東北部ばかりではなく、岐阜県南東部や長野県南部に分布することがわかった。

一方 WITTMER (1954) が検索表に示した *M. sulcicollis* と *M. ohbayashii* の腹板末節の形態差は、腹板末節の形 P と Q の違いとなっており、それは同一種内の変異となってしまう、種の識別には使用できないことが明らかとなった。念のため本種の交尾器の形 K および J を高橋(1995)が示している *M. sulcicollis* の♂交尾器の図と比較したところ、本質的な違いはあまり感じないように思えた。すなわち、第4図に示した♂交尾器の腹片と陰茎のなす角 x は個体によってさまざま、その角が小さければ高橋(1995)の示した♂交尾器の形は J に殆ど重なってしまう。ただ、2枚重なっているもののうち交尾器外側の腹片が神奈川産の *M. sulcicollis* の方が大きく上にずれていることと、腹片の側縁先端左右にある切り欠けが神奈川産の *M. sulcicollis*

にはないことのみが異なっていた。そこで高橋氏から恵与していただいた神奈川厚木市不動尻産の *M. sulcicollis* の標本を使い、交尾器と末端腹節の図を描いてみた結果、高橋(1995)に描かれている同種の図は、2枚の腹片が大きく上下にずれたため陰茎が下方に引き下げられるように変形した個体であることが判明した。しかし、腹板末端の形が似ていても、陰茎や腹板全体の形は *M. sulcicollis* の方が非常にずんぐりしており、交尾器の腹片の形や腹板から上方に向かって派出している分枝の形も WITTMER (1954) が図示しているように、大きく異なることによって両種は全く異なった種であることが再確認された。

最後になってしまったが、この報文を書くに当たって標本の恵与をはじめ、さまざまなご指導を頂いた高橋和弘氏に厚くお礼申し上げる。

参考文献

桐山 功, 1998. 岐阜県産ジョウカイボン科甲虫の記録 (2). 啓蟄, 16(38): 8-17.
 佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫(1). 愛知県の昆虫(上): 204-231.
 高橋和弘, 1995. 「神奈川県のジョウカイボン科」の追補について. 神奈川昆虫報, (113): 19-37.
 WITTMER, W., 1954. Zur Kenntnis der Malthodes Japans. Mushi, 26(9): 47-52.

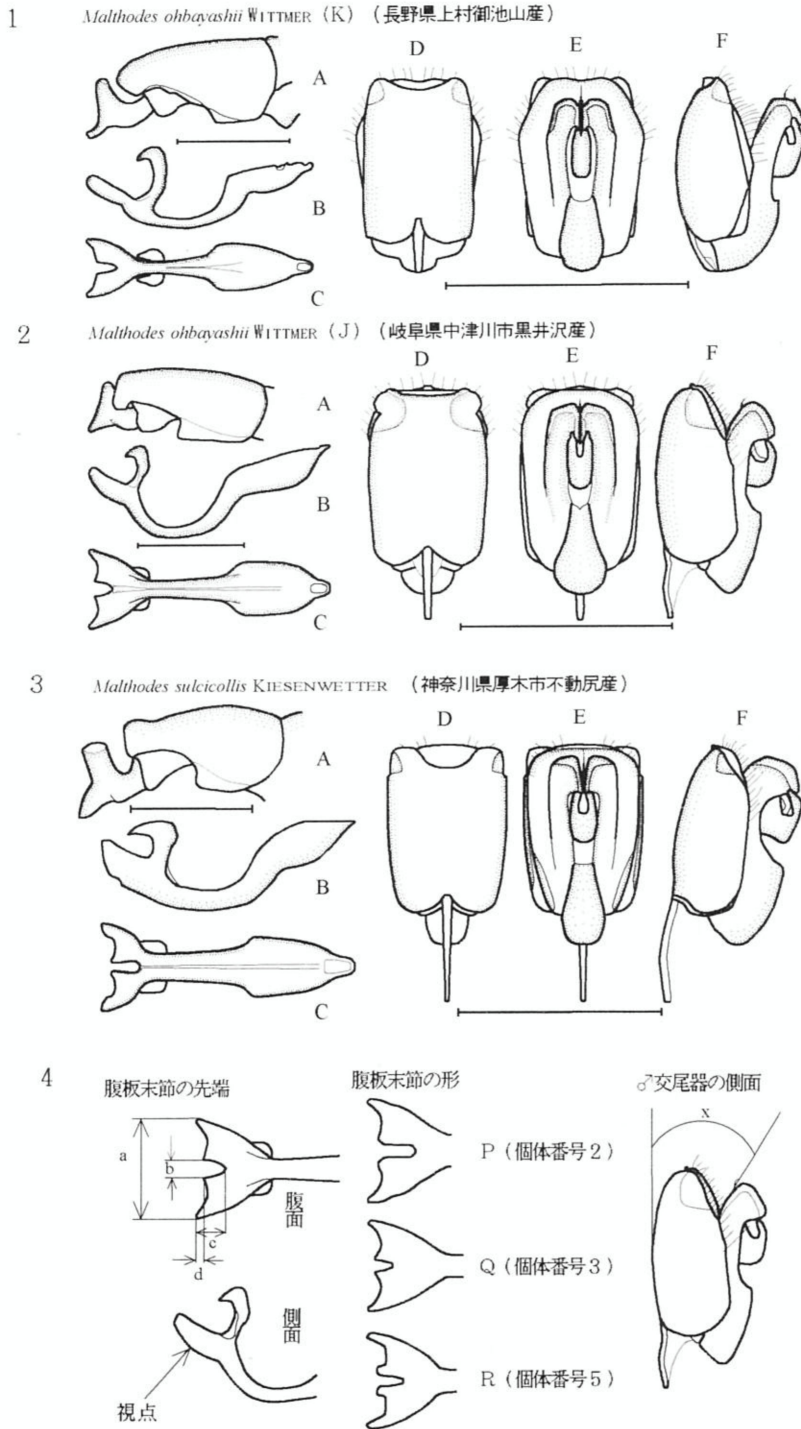


図1~3は腹部末端と♂交尾器 A: 末端背板の側面 B: 腹板末節の側面 C: 腹板末節の腹面 D: ♂交尾器の腹面 E: ♂交尾器の背面 F: ♂交尾器の側面 (スケールはすべて0.5 mm) (岐阜市)

トゲムネアラゲカミキリの生態に関する一知見

江崎功二郎・井村正行

トゲムネアラゲカミキリ *Aragena mizunoi* HAYASHI の生態に関しては、滑田(1987)が成虫の後食や発生時期について報告しているが、筆者らも本種の生態に関して若干の知見を得ることができたので報告する。報告に際し、採集地の情報を提供して頂いた東京都の森川清志氏にお礼申し上げる。

1) 採集記録

4♂5♀, 岐阜県吉城郡上宝村中尾空山, 1997. VI. 14~15, 井村・江崎採集。

岩田(1988)が本種を採集した同じサワグルミ立木であると思われる。この生立木は根元付近の幹直径約 25 cm 樹高約 15 m あり、上半分が枯死した高さ 1 m 程度の半枯死木が根元から株立ちしていた。

筆者の一人である井村は、樹幹上部の細く突き出た一年(?) 枯損枝に静止している個体を複数採集しており、2日続けて同じ枯損枝からはほぼ同じ状態で採集している。その他の個体は生葉の上表面に静止する個体を見つけ採りしたか、または生葉付き枝のスィーピングによって採集した。

2) 脱出記録

筆者の一人である江崎は1998年5月30日に当所に訪れた際、このサワグルミ立木が架線工事のため伐倒整理されていることを発見したため、発生源捜索のためにカミキリムシ科幼虫の食害痕が見られる材を細枝から幹に至るまで回収した。6月2、16日に♂成虫が、この生立木に株立ちしていた半枯死木から採取した枯死幹から脱出した。この幹にはこの他に脱出孔がいくつか見られ(写真1)、この材が少なくとも数年間は利用されていることがわかれ

た。幼虫の穿孔痕は材の樹皮内部に見られ、樹皮下や材部には見られなかった(写真2)。本種と思われる幼虫も1個体発見された(写真3)。

3) 飼育記録

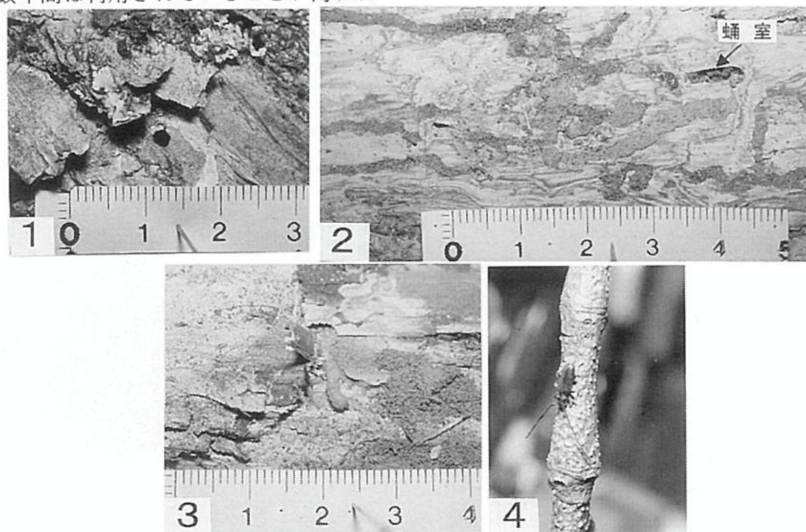
飼育容器(φ7 cm, 高さ12 cmの小瓶)に新鮮なサワグルミの生葉と枯死枝を束ねて入れて、2週間程度の間、脱出個体の飼育を行った。1日に数回程度観察を行ったが、日中はほとんどの場合に枯死枝上に定着しており、静止または後食しているのが観察された(写真4)。時々、容器内を活発に徘徊していたが、生葉に至ることはなく枯死枝に戻ってきた。

4) おわりに

滑田(1987)は、四国での野外採集時の観察で本種がサワグルミの生葉の葉脈を後食することを報告している。今回の野外及び飼育観察において生葉の後食は確認されず、枯損枝に定着する本種の行動を観察した。後食は樹皮の摂食が考えられるが樹皮表面に明確な後食痕が見られなかったため、樹皮表面に発生した菌類などを摂食していた可能性もある。また、幼虫はサワグルミの枯れ幹の樹皮内部を穿孔していることが明らかとなった。

引用文献

- 岩田隆太郎・岩田厚子, 1988. トゲムネアラゲカミキリの岐阜県における記録とその体色について. 月刊むし, (212): 36.
滑田保生, 1987. 四国におけるトゲムネアラゲカミキリの追加記録. 月刊むし, (202): 2.
(江崎: 石川県林業試験場; 井村: 石川むしの会)



1. 脱出孔; 2. 幼虫の穿孔痕と蛹室; 3. 幼虫; 4. 後食を行う雄成虫。

○エゾゲンゴロウモドキの網走支庁における記録

エゾゲンゴロウモドキ *Dytiscus marginalis czerski* ZAITZEV の網走支庁における分布は、これまで斜里郡北部のみとされてきたが、筆者は常呂郡端野町川向でも採集しているので報告する。

2♂♂2♀♀, 北海道斜里郡斜里町知床, 18. VIII. 1998, 筆者採集; 3♂♂5♀♀, 同所, 13. IX. 1998, 筆者採集; 4♂♂, 北海道常呂郡端野町川向, 24. X. 1998, 筆者採集; 1♂5♀♀, 同所, 30. X. 1998, 筆者採集。

新産地の端野町は、網走市、北見市などに隣接し、この辺りはゲンゴロウモドキが圧倒的に多く、他の大型ゲンゴロウ類は少ない。

採集した環境は、北海道では珍しく田や畑に囲まれた平地で、ゲンゴロウモドキ、ヒメゲンゴロウ、オオヒメゲンゴロウ、マメゲンゴロウ、クロズマメゲンゴロウ、ガムシなども見られた。これらの水生甲虫からもわかるように、水質はあまり良いものではなかった。ただ、すぐ近くに比較的水質の良い池があったが、半水性植物に覆われて採集できなかった。おそらくこの池が発生地だと思われる。

エゾゲンゴロウモドキの北海道における分布は、ゲンゴロウモドキと比較するとかなり限られているようである。分布域の調査あるいはゲンゴロウモドキとの混生地の調査などに少しでも参考になれば幸である。

末尾ながら、日頃よりご指導頂いている名古屋女子大学の佐藤正孝教授、文献でお世話になった東京農業大学の渡辺泰明教授および旭川市の松本英明氏に厚くお礼申し上げる。

参考文献

- 松井英司, 1997. 北海道で採集した水生甲虫類. 北九州の昆蟲, 44(1): 25-32.
 松本英明・荒木 哲・森 正人, 1989. 北海道のゲンゴロウモドキ類. 月刊むし, (225): 19-25.
 森 正人・北山 昭, 1993. 図説日本のゲンゴロウ. pp. 217. 文一総合出版, 東京.
 大原昌宏, 1996. 北海道の水生甲虫. 北方林業, 48(3): 5-8.
 佐藤正孝, 1985. ゲンゴロウ科. 原色日本甲虫図鑑(II), pp. 183-200. 保育社, 大阪.
 山本直樹, 1998. 1996年ゲンゴロウ採集記. 越虫, 27: 1-36.
 (東京農業大学オホーツクキャンパス, 上手雄貴)

○徳島県におけるナガオチバアナアキゾウムシの採集例

ナガオチバアナアキゾウムシ *Leptanchonus minatoi* MORIMOTO, 1982 は和歌山県および高知県からの記録が知られている。

筆者は採集者の吉田正隆氏のご好意によって徳島県産の土壌性ゾウムシ類を検査する機会に恵まれた。その中の1種が *Leptanchonus* 属であることが小島弘昭博士のご教示で判明し、タイプ標本と比較した

結果、本種であることが確認できた。徳島県からの記録はないようなので初記録として報告する。

1頭, 徳島県山川町高越山(標高1,080 m), 9. V. 1998, 吉田正隆採集。

末筆ながら、貴重な標本をご恵与下さった徳島県在住の吉田正隆氏と様々な面でお世話いただいた九州大学の森本 桂, 小島弘昭両博士にお礼申し上げます。

参考文献

- MORIMOTO, K., 1982. The family Curculionidae of Japan. I. Subfamily Hylobiinae. *Esakia*, (19): 51-121.
 (東京農業大学, 吉武 啓)

○奈良県のアシプトゾウムシ3種の記録

筆者は、小島・森本両博士によって最近記載された次の *Ochyromera* 属の3種を1本のヒメシャラ生木のピーティングにより採集した。これらは小型種のため採集記録が少ないので報告しておく。

O. horikawai KOJIMA & MORIMOTO, 1996

O. nipponica KOJIMA & MORIMOTO, 1996

O. hiramatsui KOJIMA & MORIMOTO, 1996

3種とも採集日は同じで、多数採集した。奈良県吉野郡上北山村和佐又山, 20. IX. 1997。

末筆ながら、*Ochyromera* 属3種を快く同定して頂いた九州大学の小島弘昭博士に厚くお礼申し上げます。

参考文献

- KOJIMA, H. and K. MORIMOTO, 1996. The tribe Ochyromerini (Coleoptera, Curculionidae) of Japan II. Genus *Ochyromera* PASCOE. *Jan. J. Ent.*, 64(3): 570-586.
 (和歌山市, 平松広吉)

○クロアリヅカエンマムシを福島県塙町で採集

クロアリヅカエンマムシ *Hetaerius optatus* LEWIS はクロクサアリの巣から発見されることがあるという好蟻性のエンマムシであるが、珍しい種で生態、地理変異など詳しいことはわかっていない(大原, 1997)。筆者は本種を福島県塙町で採集した



ので報告する。

1頭、福島県埴町宮川南沢左岸（環境庁メッシュ番号 5540-32-49）、23-24. V. 1998, 芳賀 馨採集, 大原昌宏保管。

採集地点の沢は八溝山の前衛峰である大笹山に発して北流する久滋川の支流である。右岸を通る林道の終点に木橋があり、これを渡った地点に流入する流水のない小さい枝沢に沿って設置した酢酸入りピットフォールトラップに本種が入った。同時にムネアカオオアリともう1種のアリが各2頭得られたが、トラップの総数（35個）に対する個体数としてはむしろ少なすぎ、同じトラップに落ちたわけでもないのに、本種とは無関係と考えてよいだろう。周囲の環境は上記渡河点を境に広葉樹の自然林となっており、古い時代に択伐された形跡は明らかであるものの、ブナやモミの多い比較的良好な森林である。

ÔHARA (1994) によれば本種の典型的な個体は背面に黄色い長い毛を有するが、この長毛を欠くかわりに短い毛を密に装う個体もあるという。今回得られた個体は後者の具体例として ÔHARA が図示した個体（神奈川県真鶴産）と比べてさらに毛が短かく、前胸背、上翅、尾節板のいずれにおいても、毛の根元である点刻それ自体の直径の1~1.5倍の長さしかなく、一見無毛に見える。ÔHARA が指摘しているようにこのような個体は未記載の別種である可能性も否定できないのかもしれないが、結論は今後の研究に期待したい。

末筆ながら文献の入手について便宜を図って下さった大原昌宏博士に心からお礼申し上げる。

参考文献

- ÔHARA, M., 1994. A revision of the Superfamily Histeroidea of Japan (Coleoptera). *Ins. matsumu. n.s.*, 51: 1-283.
大原昌宏, 1997. 日本産エンマムシ上科概説. VI. 甲虫ニュース. (119): 1-6.

(埼玉県浦和市, 芳賀 馨)

○キバマルタマキノコムシ平倉の記録

筆者は本誌第119号に三重大学平倉演習林の未記録の甲虫24種を報告し、次いで第123号に1種追加したが、さらに種名が確定したものがあので、報告する。

キバマルタマキノコムシ *Agathidium (Neocele) akemiae* FUJIMORI

1♂, 三重県美杉村平倉, 8. VI. 1997, 平野幸彦採集。

本種はごく最近、愛媛県面河の1♂の標本で記載されたもので、巨大な牙を持った得意な形態(写真)のタマキノコムシである。早はわかっていないが、同日採集した中にもそれらしきものはなかった。なお、この記録は本州から初めてのものである。平倉は誠に素晴らしい採集地と思え、まだ同定できない



日本未記録種と思われるものもある。

参考文献

- FUJIMORI, T., 1998. A new species of the genus *Agathidium* (Coleoptera, Leiodidae) from Japan. *Jpn. J. syst. Ent.*, 4(2): 381-382.

(神奈川県小田原市, 平野幸彦)

◇大会報告◇

日本鞘翅学会第11回大会は1998年11月14日(土)~15日(日)に松山市の愛媛大学農学部において開催された。

初日は13時から総会、続いて久松定成博士の招待講演「世界のカブトムシ亜科について」があり、スライドによる珍しいカブトムシが写され、興味深いお話があった。その時の標本は別室に展示され、見事なコレクションに目を見張った。続いて口頭発表に移り、11題の研究発表が行われた。また、別室で「北部タイの食虫習俗と食用昆虫」のポスター発表があった。終了後18時半より懇親会が行われ、瀬戸内の魚介類に舌鼓を打ち、虫談に花が咲いた。

二日目は9時半から「地域自然史の意義と問題



大会の一コマ(愛媛大学農学部)

点」と題してシンポジウムが行われ、佐々治寛之博士の基調講演と4名の発表があり、討論に入った。午後からは標本同定会があり、14時半から5つの分科会があり、17時ごろ成功裡に終了した。

今回の参加者はおよそ100名であったが、内容は充実し、盛り上がった大会であった。大会運営に尽力された愛媛大学の方々、お手伝いしていただいた人達に厚くお礼を申し上げたい。なお、次回の第12回大会は11月13日(土)～14日(日)に豊橋市自然史博物館にて開催する。(企画担当、平野幸彦)

◇会計報告◇

1997年度決算(1997年1月1日～12月31日)

収 入	予 算	決 算	増 減
前年度繰越金	3,900,000 円	4,988,507 円	1,088,507 円
会 告 費	3,000,000	3,631,000	631,000
広 告 費	60,000	60,000	0
出版物売上金	98,000	118,000	20,000
大会会場費	70,000	0	-70,000
雑 収 入	0	5,799	5,799
合 計	7,128,000	8,803,306	1,675,306

支 出	予 算	決 算	増 減
会誌印刷費 (Elytra)	1,900,000 円	1,807,621 円	-92,379 円
(甲虫ニュース)	500,000	606,689	106,689
会誌送料	750,000	740,841	-9,159
通 信 費	200,000	139,355	-60,645
事 務 費	100,000	114,265	14,265
大会会場費	30,000	0	-30,000
予 備 費	50,000	0	-50,000
次年度繰越金	3,598,000	5,394,535	1,796,535
合 計	7,128,000	8,803,306	1,675,306

(会計担当、齊藤明子)

◇役員の変更◇

昨年度の日本鞘翅学会第11回大会で開催された総会(11月14日、於愛媛大学)において、平成11～12年度の新役員が選出されました。

<会長>大林延夫

<副会長>高桑正敏

<常任幹事>渡辺泰明(総務・庶務); 野村周平(同); 岩田隆太郎(同); 齊藤秀生(同); 齊藤明子(会計); 上野俊一(編集委員長); 新里達也(Elytra編集); 妹尾俊男(甲虫ニュース編集); 川那部 真(編集補佐); 佐藤正孝(渉外); 中村俊彦(企画); 吉富博之(同)

<幹事>安藤清志; 荒谷邦雄; 長谷川道明; 今坂正一; 奥島雄一; 酒井雅博; 佐々治寛之; 初宿成彦

<会計監査>藤田 宏; 林 靖彦

<Elytra 編集委員>上野俊一(委員長); 近 雅博; 森本 桂; 新里達也; 野村周平; 大原昌宏; 岡島秀治

◇日本鞘翅学会(1999年)◇

<現状>1998年10月末現在の会員数: 名誉会員3名, 賛助会員8名(内団体1), 一般会員570名, 海外会員13名, 計594名。

《事務局・入会問合せ先・住所変更連絡先・退会届先・Elytra 投稿先・例会問合せ先》〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1, 国立科学博物館分館 動物研究部 昆虫第二研究室気付, 日本鞘翅学会宛 (tel. 03-3364-2311/fax. 03-3364-7104/e-mail. nomura@kahaku.go.jp)

《甲虫ニュース投稿先》〒196-0012 東京都昭島市つつじが丘2-6-22-806, 妹尾俊男宛 (tel. 042-541-6640/e-mail. senoh@ra2.so-net.ne.jp)

《入会方法》上記連絡先まで連絡(追って入会申込書等を送付)。大会(11月)の受付での入会も可能。

《会費》新入会費¥1,000; 一般会員年会費¥6,000; 国外会員年会費¥8,000; 賛助会員年会費¥10,000; 以上、前納制。

《今年度大会問合せ先》〒441-3147 愛知県豊橋市大岩町大穴1-238, 豊橋市自然史博物館, 長谷川道明宛 (tel. 0532-41-4747/fax. 0532-41-8020/e-mail. hasegawa-michi@msi.biglobe.ne.jp)

《木曜談話会》〒110-0015 東京都台東区東上野4-26-8, 福田ビル6F(tel. 03-3841-4878) (毎週木曜日, 20:00～)

《(旧)鞘翅目学会・(旧)甲虫談話会・鞘翅学会の刊行物バックナンバー取扱い》〒973-8691 いわき市内郷郵便局私書箱11号, TTS昆虫図書館宛 (tel. 0246-27-2521/fax. 0246-27-4031)

◇電子メールで投稿される方へ◇

編集者の電子メールのアドレスの一部が変更になりましたので、ご留意願います。

senoh@ra2.so-net.ne.jp

甲虫ニュース 第125号

発行日 1999年3月31日

発行者 大林延夫

編集者 妹尾俊男

発行所 日本鞘翅学会 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館動物研究部昆虫第二研究室 ☎ 03-3364-2311

印刷所 (株)国際文献印刷社

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社